

ハイデルベルク信仰問答講解説教 5 1 「すべてを備えられ」(2012年9月23日 礼拝説教)

【聖書箇所】

主はこう言われる。呪われよ、人間に信頼し、肉なる者を頼みとし／その心が主を離れ去っている人は。彼は荒地地の裸の木。恵みの雨を見ることなく／人の住めない不毛の地／炎暑の荒野を住まいとする。祝福されよ、主に信頼する人は。主がその人のよりどころとなられる。彼は水のほとりに植えられた木。水路のほとりに根を張り／暑さが襲うのを見ることなく／その葉は青々としている。干ばつの年にも憂いがなく／実を結ぶことをやめない。(エレミヤ17：5-8)

だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。』(マタイ6：31-34)

【説教】

今日は、第50主日、問125の問答のところ注目したいと思えます。ここは主の祈りの四番目の祈り「われらの日用の糧を今日も与えたまえ」についての問答となります。以前も申しましたが、主の祈りは二つに分けることができまして、前半の三つが神さまのための祈り、後半の三つがわたしたちのための祈りとなります。今日の「日用の糧」を求める祈りから、主の祈りは後半部分、わたしたちのための祈りに入ります。ただ分ける申ししましても、それは完全に分たれるものではなく、両者は密接に関わり合っております。つまり前半の祈りが基礎にあつてこそ、それに続く後半の祈りを祈ることができるのであります。

前回の説教では、「御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」のところを考えました。「御心」神さまの御意志を求めること、それは同時にわたしたちが自分の思い、自分の意志を手放すことだと申しました。祈りにおいて大切なことは自分を手放すことです。そこでわたしたちは神さまの御心と一つになる。あるカトリックの神学者は「御心に溶ける」と言います。そこでこそ祈りは祈りとなり、御前に届くものとなります。

でもそれは今日のところ、「日用の糧」を求めることと矛盾するのではないかと。日用の糧、この「糧」と訳されている言葉は、要するに「パン」ということです。毎日の食卓に出てくるパン。日本人ならご飯と言ってもいいでしょう。今朝、皆さんは朝食を食べて来られたと思えます。何を食べられたでしょうか。それを思い浮かべられたらよいのです。何も崇高なことではありません。普段の食卓です。それを今日も与えてくださいと祈る。自分を手放すことを教えておきながら、そのすぐ後で今日のご飯を与えてくださいと祈るのは、何とも拍子抜けしてしまうと思われるかもしれません。自分を手放すなら、それこそ断食でもする思いで自分を捨てる覚悟があるか。それくらいの勢いがあってもよいのではないかと考える。ところがここで祈られていることは今日のご飯を与えてくださいという祈りです。自分を手放すこととご飯をくださいと祈ることはどう関係するのでしょうか。

主の祈りが、前半と後半に分かれていることは意味深いことです。それは前半の祈りが土台にあつてこそ、この後半を祈れるということです。つまり自分を手放した時に、初めてわたしたちは「日用の糧を与えてください」と本当に祈ることができる。言い換えれば、自分を手放せない時には、まだわたしたちはこの「日々の糧を与えたまえ」を本当の意味で祈っていないということなのです。

飽食の時代、たくさんの食べ物が箸もつけられないまま捨てられていきます。人々の生活はますます豊かに、また便利になりました。でもそれは戦後の高度成長の後のことで、それまでは厳しい生活があったのです。今日は教会独立記念の礼拝ですが、この教会も貧しく苦しい時代を生き抜いてきました。牧師

館の部屋の電灯には坪井教会の古い会堂から持ってきた電灯が付けられています。それはその苦しい時代を忘れないという思いが込められていると齊藤先生から聞いたことがあります。ここには戦中、戦後の厳しさを経験された方々が多くいらっしゃいますが、その方々は物の大切さ、特に食べ物大切さは身にしみて経験してこられたと思います。現代はあらゆるものが使い捨てになり、「もったいない」という感覚ももはや薄れつつあります。

そういう中で、この「日用の糧」を求める祈りもあまり必要を感じなくなっている。今日、果たして真剣に今日のご飯を求めることができるでしょうか。それよりも祈ることは他にたくさんあると考えている。祈りの優先順位からするとご飯のことは下の方かもしれません。つまり人間は満ち足りることで求めなくなるのです。求めないことは、自分で事足りていると考える。つまりそこでは神さまを必要としなくなっているのです。自分を手放すということはそこと関係してきます。

これは信仰のことについても同じことが言えます。教会には悩みを抱えた人たちが集まっているという考え方が世の中には根強くあります。教会にいらっしゃいと誘っても、「今は別に困っていないから」と断る。自分だけで大丈夫。神さまの助けはまだ必要ない。しかし教会が問題にしているのはそういう表面的な人間の悩みや苦しみではない。根源的な人間の罪の問題です。それは誰もが抱えております。例外はありません。ですからすべての人が教会に来る必要があります。すべての人が自分は救いを必要としていることを知らなければなりません。表面的に満ち足りていても、具体的な悩みがなくても、この罪から救われなければ、人間は本当の意味で生きることができないのです。自分は強い、大丈夫と考えていることが、事柄の本質、人間の本当の闇を見えなくさせています。

満ち足りているから祈らなくてよいのではなく、満ち足りているからこそこの祈りを祈る必要があるのではないのでしょうか。それはこの信仰問答が示していることであります。つまりこの祈りの中心は何か。それはすべての唯一の源である神さまを覚えさせてください、その神さまの祝福なしにはすべては空しいこと、そして自分の信頼をただ神さまにのみ置くということです。つまり「日用の糧」を求める祈りは、ただご飯の祈りではない。その前提に主の祈りの前半があります。御心を求める。そういう信仰者としての祈りなのです。今、必要なものが備えられて、何不自由なく暮らしている。だから神さまは必要ないということではなく、そこで信仰者は何を思うか。そのすべてを備えてくださった唯一の源が神さまであること。神さまの祝福なしに今の生活は一時たりとも成り立たないのだということを感じる。そのためにこの祈りは与えられているのです。つまりパンを見て、日々の食卓を見て、その祝福の源である神さまを感じる祈りなのです。

「人はパンだけで生きるものではない」と主は言われます。お腹がすいたからご飯を食べる、健康を維持するためにパンがあると考えるならば、わたしたちにとって食べ物は単に動物が食べる餌と同じものになってしまいます。パンを神さま抜きで食べるとそうなります。ただ栄養補給のために食べる、義務で食べるということになります。また多くの人々は、パンは自分で稼いだお金で得るものと考えています。自分はパンを得るために働いていると考えます。そうなるとパンを得たことに感謝はありません。自分が働いて得た当然の報酬ということになるでしょう。ご飯を粗末にする話をしましたが、それは自分が働いて得たものと考えます。自分が得たものを自分がどうするかは自分の勝手なのです。そこに感謝はありません。それが人間の罪の姿です。そういう自分を手放すことがまずここで求められていることではないでしょうか。自分を手放し、神さまを覚えるのです。

「日用の糧を与えたまえ」と祈る時に、わたしたちの中に神さまがすべての源であるという信仰が立ち上がります。そして今、目の前にある食卓が決して自分で得たものではない。神さまの祝福と命の養いによって与えられていることが見えてくるのであります。それはどんなに貧しい食卓でもそうです。いやむしろその食パン一枚、ご飯一膳にも神さまの御手は働いている。神さまの祝福なしにはそれはあり得ないということ。ですからこの「日用の糧」は本当に毎日のありふれたご飯なのです。そこに如何に神さまの恵みを見るかということです。

ルターは、この糧を更に拡大解釈しまして、「食物、着物、家、土地、家畜、金、財産、信仰深い夫婦と善良な子ども、信頼できる僕、敬虔で誠実な支配者、よい政府、よい気候、健康、秩序と名誉、真実な友、隣人等」と挙げています。しかしカルヴァンは、これはあくまでも「パン」であって、これ以上にあまり意味を広げてはいけません。わたくしもカルヴァンの意見に同感します。それは小さなパンでいい。そこに神さまの祝福を見る信仰が大切なのです。ルターのようにあれもこれもと広げると、神さまの祝福がこの小さなパンにも注がれていることが見えなくなってしまうのではないかと。「信仰深い夫婦と善良な子ども、よい政府」随分ハードルが高いなと思ってしまいます。

ルターの解釈には今から五百年も前の社会状況が反映されているでしょう。でも現代ならどうでしょうか。わたしたちの生活に必要なものは、もっと広がるかもしれません。携帯電話、パソコン、エアコン、自動車・・・これは挙げていったらきりがありません。もちろんそこにも神さまの祝福があるでしょう。そのようにして生活も便利になりました。けれどもそれがなかったら祝福がないということではない。人と比べてあれも足りないこれも足りない。だから神さまは自分を顧みてくださらない。そうではないのです。カルヴァンが言いたかったのはそこではないか。それはパンでいいのです。その小さな一切れに神さまの祝福を見る信仰が大事なのです。

マタイ福音書の山上の説教のところを読みました。空の鳥、野の花、その一つ一つにも神さまの養いがある。それならわたしたちにはなおさらではないか。なぜ食べること、飲むことに思い悩むのか。神さまはちゃんとわたしたちの必要をご存知である。この御言葉は深い。いやそれは生活に困っていない人の言う言葉だと思ふ人もいられるかもしれない。まずは食べることだ。今日のパンだ。よろしい。あなたが心配し、足りない、足りないと思つくと、そのパンの一つにも神さまの祝福は注がれている。それを信じていることができるか。そこにわたしたちの生き方はかかっている。

何より、キリストはどんな小さなパンにも神さまの祝福を注ぐためにこの世に来てくださったのではないかと。真の人と成られ、わたしたちの貧しさを知っていてくださるのではないかと。今日のパンを心配するわたしたちの思い煩いを知っていてくださるのではないかと。そのために主は十字架におかかりになられた。すべての生活の心配を、思い煩いを御自身に引き受けてくださるた

めです。だからこそわたしたちは神さまを信頼して今日を生きるのです。生活が豊かだから祝福され貧しかったら祝福されていないと考えるのは早計です。豊かでも貧しくても、その生活を根底で支えてくださるのは神さまなのです。そこに命を注いで祝福してくださるためにキリストは来られたのです。その神さまを信頼する時に、わたしたちはすべてを感謝して毎日を生きていくことができます。

エレミヤ書の御言葉を読んで終わりにします。わたしたちはパンをよりどころとしているわけではない。主をよりどころとしている。その主がすべてを備え、すべてを祝福してくださいませ。イエス・キリストの出来事がその証拠です。祈りましょ